

## 酒船石の復原

### 飛鳥資料館

奈良県明日香村にあった2個の酒船石のうち出水の酒船石は、当館が開館以来、レプリカの製作を計画していたが、着手にまでいたらなかった。今回、当館の「飛鳥の石造物」展を機に実物を所蔵する碧雲荘の御協力によって実現にこぎつけた。また、岡の酒船石はかつて作成された模造があり、これを原形として模造を製作した。

**岡酒船石の模造** 飛鳥寺東南の丘上にある酒船石で、東西長軸5.5m、南北幅2.3m、厚さ1mの花崗岩の上面に楕円形と円形の窪みを作り、直線の溝で結んでいる。東端を5.5度高くし、傾斜を安定させるため、西底に枕石を入れ固定している。模造はコンクリート仕上げである。まず、強固な木枠の中に型を固定し、中に鉄筋を入れた。コンクリートを茶色に着色したが、これには数十種類のサンプルを試作し、検討した。実物の表面には飛鳥の花崗岩の特徴である黒色砂岩が混入しており、これを表現するため黒色染料と砂土をまぜ、写真をもとに配した。この上にコンクリートを流し込み、約1ヵ月後、木枠を取りはずし、クレーンで反転させ、現地と同じ傾斜で設置した。このままでは表面に細かいコンクリートが集まり、被膜の光沢が目立ったため、ハンマーで叩き仕上げた。

**出水の酒船石の模型** 大正5年に、飛鳥川東岸の字出水から出土した酒船石は、その後、京都に移され、現在、個人の邸宅の庭園にある。当研究所埋文センターの協力によって実測図を作成し、また、細部を丹念に撮影した写真を参考にして、花崗岩を模刻した。この作業で最も時間を費したのは用材の原石採取であった。段違い石の、上段は4.3×3.2mで西洋梨を半載したような形である。下段は幅約10cmの溝を受け、途中水溜用の堰を作り、小円の排水孔を穿っている。この花崗岩は飛鳥周辺では入手できず、鳥取県下と奈良県の生駒山麓で採石した。石材加工は荒仕上げの後、小叩きで表面を整形した。細長い溝は、縁部と底が丸みをおびていて、飛鳥時代の加工技法を復元的に試みる成果があった。完成した2つの酒船石は、現地がかつて発見されている導水用の車石で連結した。酒船石の用途については、濁酒・朱・ナタネ油の精製器説、拝火教の薬品調合施設などの説があるが、韓国慶州に残る統一新羅時代の鮑石亭・雁鴨池の石槽をもとに水を流す展示とした。(猪熊兼勝)

岡の酒船石の模造